

Nietzsche - Legende の後退

—— 最近のニーチェ論争から ——

恒 吉 良 隆

一

今秋（一九六七年）十月よりむこう約五年間にわたって、Berlin の W. de Gruyter 出版社から新しいニーチェ全集が刊行されることになった。編者は Giorgio Colli と Mazzino Montinari である。全八部三〇巻の予定であるが、無論ニーチェの著作集としてはかつてない最大の規模のものである。単に規模が大きいというばかりではなく、「学問的に信頼しうる唯一、完璧の historisch-kritische Ausgabe」（宣伝パンフレットから）になることが十分予想されるもので、ニーチェ研究者にとつてはまさに待望の書と言つていい。因みに現在までに出版された主なニーチェ全集としては、いわゆる Groboktav 版（19Bde., 1894ff.）¹ Musarion 版（23Bde., 1920-29）² Kröner 版（12Bde., 1930ff.）³ それに戦後になつて Karl Schlechta が編集出版した Schlechta 版（3Bde., 1954-56）⁴ などが挙げられるが、実のところこれらの全集はすべて、テキスト・クリティックにある種の疑義を残すという点で、完全

に信頼できるものとは言い難い一面を備えていた。（C. H. Beck が中心になつて手記、草稿、断片などのより完全な Historisch-kritische Gesamtausgabe が試みられたことがあつたが、第二次世界大戦のため五巻を出しただけでやむなく中断されている。）

ニーチェの著作はそのほぼ半分が遺稿によつて占められるといわれている。にもかかわらず、いままでその膨大な遺稿の信頼するに足るテキストは存在しないままであつた。そしてこれがニーチェ研究にとつて一つの大きな障害になつていたことは言うまでもない。ところで今回発行の運びになつたニーチェ全集は、「ニーチェ文庫」（一九五〇年以來ワイマールのゲーテ・シラー文庫に併置されている）に保存されている原稿、ノートなどの厳密な文献学的研究に基いて、遺稿、断片類を含めたすべての作品を収録するものであり、今後のニーチェ解釈に何らかの新しい展望を開いてくれるのではないかと、期待も大きいわけである。さてニーチェが死んですでに六〇数年にもなろうとして

いるのに、なぜ今日までそのような不完全なテキストに甘んじなければならなかったのか。それにはいくつかの理由があるが、なかでもニーチェの実妹エリーザベト・フェルスター・ニーチェが大いに関係している。エリーザベトはニーチェの発狂後まもなく（一八九四年）、兄の手になるいくつかの著作、断片、未定稿などを、自ら設立した「ニーチェ文庫」に整理・保管した。そのこと自体はエリーザベトの後世に残る偉大な功績であったが、逆に彼女はそれら保管された資料・文献をたびたび独占的に私物化し、ニーチェの全体像を相当の程度にゆがめ伝える結果となった。性格的にみて極めて野心家の、計算高い女性であったことは確かで、実生活のいろいろな面でそのことが裏づけられている。その個々についてはここでは触れないが、E. Salin も言うように、彼女の行為に、ある陰險な悪質極まりない一面、「稚拙な探偵小説の素材にでもなりそうな」一面があったことは、近年になってかなり明らかにされてきた。たとえば、彼女は、ニーチェの原稿に加筆、改竄の手を加えたり、自分の意にそわない箇所を勝手に削除したりしている。そして兄ニーチェがあたかも自分を真の理解者として一番信頼していたかのような印象を世のなかに与えようと、いろいろな手段を講じた。実際はニーチェ自身、この才気走った妹には幾分閉口もし、内心嫌ってもいたのであった。しかしニーチェの死後はますます、あたかもニー

チェの思想とその名声を利用するかのごとく、あるいはニーチェ全集の公刊に、あるいはニーチェに関する著作執筆に^④精力的な働きをみせる。

彼女自身はナチスが政権を握ってまもなく（一九三五年秋）死んだが、しかしその後、今次大戦の終るまでは、ニーチェの残した原稿は殆んどエリーザベト及びその周辺の人々の管轄下にあったと言っているのである。

現在、そのニーチェ文庫は東ドイツの地（ワイマール）にあるため、西ドイツの学者は文庫に立ち入ることが出来ないが、一部には今次大戦の戦後の混乱にまぎれて、もしかしたら資料、文献が幾分散逸したのではないかという心配もなされていた。一方、ニーチェ後年の手稿はひどく判読困難なものだと言われ、Pannwitzに言わせれば、それを完全に読めたのは、ニーチェの晩年の弟子であり秘書役であったペータ・ガストだけであった、とされているくらいである。そのような理由から、もはやより完全なニーチェ全集を早急に望むことは無理なことだと言われている。この度公刊になるニーチェ全集の編者たちが、いかにしてこれらの困難を乗り越え、出版にこぎつけたのか、そのあたりの事情はつまびらかでないが、ともかく、テキスト・クリティークという観点をもとに、今後再びニーチェをめぐる議論が盛んになることであろう。

ところでこの新しいニーチェ全集の編集出版を機会に、先年二ヶ年余りにわたって取り交わされたニーチェ論争をめぐって、その問題点をここでひとまず整理検討しておくことは決して意義のないことではないであろう。一九五四年から五六年にかけて出版された^⑥ Schlechta 編集のニーチェ全集が、従来のものとは異なる独自の編集方針をとっていること、また、ニーチェの遺稿、書簡文に関してその不当性をあばくいくたの註解が付されていること、そしてまた、編集後記の箇所に Schlechta 自身の長文のニーチェ論が掲げられていることなどによって、その所説をめぐってしばらく激しい口調のニーチェ論争が取り交わされた。しかもその論争に加わったのが、R. Panwitz, K. Löwith, E. Salin, W. von den Steinen といったいわばニーチェ研究者として著名な大家たちであったがゆえに、一層興味をそえられるものがあつた。Peter Pütz の近著「フリードリヒ・ニーチェ」(一九六七)の中にも、その論争の経過が簡単に言及されているが、わが国では、管見の限り、いまだ紹介さえないように思われるので、ここにその経過を述べるとともに、ニーチェ解釈の今日的な次元からその問題点の二三を少しく追究してみたい。

二

論争の経過をたどるまえに、いわば今回の論争の種をま

いた K. Schlechta 当人の基本的な姿勢をまず検討しておく必要がある。Schlechta はすでに一九三四年春、Walter F. Otto, Karl Reinhardt 両教授の推薦を受けて少壮の文献学者として「ニーチェ文庫」の所員の一人になった。その後三年間の兵役期間中を除いて終戦の年まで、同僚の Thierbach や Hoppe らとともに文庫所蔵のニーチェ文献と取り組み、現在までにニーチェに関する著書を数冊著わしている^⑦。その Schlechta が近年の著“Der Fall Nietzsche” (1959) の序文の中で回想風に次のようなことを述べている。「ニーチェ文庫に身を置くようになって初めて、私はそこでの仕事がある Grundsituation の支配下にあることを知って驚いた。」^⑧ここで言う「ある Grundsituation の支配下」というのが、先にも触れたように、ニーチェの実妹エリーザベトの甚だ身勝手な行状を意味していることは間違いないところである。一九三四年といえればヒトラーの率いるナチスが政権をとった翌年にあたるわけだが、ニーチェの思想、なかでも特に「権力への意志」の哲学が、ナチズムの志気高揚のために適宜利用されつつあった時期である。その後ニーチェとナチズムの間の関係が急速に深まっていくが、その裏にはエリーザベトの陰謀とも言えるようないくつかの事実がないわけではない^⑨。その一つがつまり、いつの間にかニーチェの主著の一つに数えられるようになった「権力への意志」という著作にまつわ

る事柄である。

現行の「権力への意志」は、もともと遺稿として残された単なる断片群であり、決してニーチェ自身の手によって一つのまとまった著作に仕上げられたものではない。残された尨大な遺稿が妹エリーザベトを中心にして整理編集され、一九〇一年に初めて世に送られた。その後、ペーター・ガストの協力のもと、ニーチェ自身が書き残していた「ニースにおける一八八七年三月一七日の草案」を基礎にして、最初のものに倍加する資料を加え（収録されたアフロリズムの数は、初めの四八三から一〇六七に増大した）、一九〇六年に出版されたものが、これまでわれわれの所有してきた「権力への意志」なのである。

Schlechte はまずこの事実を強く主張し、「権力への意志」がニーチェ自身の手になった著作でないからには、現行のこの著作を全面的に最初の、つまり「原稿に忠実な・年代順の配列」に戻すことを要求する。そして実際、彼の編集した「ニーチェ著作集」においては、「権力への意志」という標題は完全に抹殺され、その代わりに、「八〇年代の遺稿から」という題で、第三巻目の四一七頁から九二五頁に断片群そのままのかたちで収められている。これはまさに画期的なことであって、これがセンセーショナルな論議をまき起すことになった原因の第一点である。

第二に Schlechte は、ニーチェ解釈のうえから次のこ

とを繰り返し主張する。つまり、「私は結局ニーチェ自らに出版する意志のあった一八七八年から八九年にかけての作品だけをニーチェの著作と認め、それ以外の遺稿類は weglassen する。なぜなら、それらには何ら新しい、中心的思想は含まれていないからである。」^⑧ここにおいては、単に遺稿の取り扱い方が問題ではなく、ニーチェの思想をどのように捉え解釈するかという Interpretation の問題が表面化している。さらに Schlechte は、「残された手記・草稿の類をあまりに前面に押し出し過ぎることは、ニーチェの Gedankenführung における微妙なニュアンスを打ちこわしてしまふ恐れがある。」^⑨と述べているが、このような言葉の背後には、エリーザベトや A. Bäumler, などが「権力への意志」をいわば「でっち上げ」て、そこにニーチェの中心思想を求めようとしたことに対する Schlechte の根強い反発が感じられる。

それでは Schlechte はニーチェの全体像をどのように捉えていたのか。ルー・アンドレアス・サロメが言及して以来すでに定説になった感のある、いわゆるニーチェの思想発展段階の三区分法（すなわち①一八六九年から一八七六年にいたる時期で、ショーペンハウアーとヴァーグナーに深く影響されて浪漫的・理想主義的な傾向をもつ第一期、②一八七六年から一八八一年にいたる時期で、ショーペンハウアーやヴァーグナーを乗り越えて、懷疑とニヒリ

ズムの中へと突き進んでいく実証主義的な傾向をもつ第二期、③一八八一年から一八八八年末にいたる時期で、ニーチェ独自の思想の輪郭が明確に浮き彫りされる円熟期の第三期)を援用するならば、Schlechta は明らかにこの第二期及び第三期、特に第二期のニーチェを本来のニーチェとして解釈する。「私は元来ニーチェの著作は“Menschliches, Allzumenschliches”をもつて始まると主張したい。」^⑧そう述べて Schlechta は、ニーチェ自身が自らの第一期の作品に対して疑問を投げかけている後年の文章を四つ五つ例示している。一方また、従来“Also sprach Zarathustra”が余りに重要視され過ぎてきた傾向を指摘して、“Zarathustra”において啓示される思想や言葉はすでにそれ以前の作品において大方語られており、ツァラトゥストラの形象も、シチュエイションも、Stimmung も決して新しいものでないことを強調する。こうして Schlechta は、従来の伝説的ニーチェ像の被膜を次々に剥がしていくのであるが、はたしてその結果ニーチェにどのような積極的評価を加えるか。実はそこが最大の論点とならなければならぬはずなのであるが、論述の輪は、ニーチェの懐疑的な遠近法主義、ニーチェと科学との関係、認識論などにまで拡がりながらも、殆んどニーチェに対する積極的評価が打ち出されないままに終わっていると言わざるを得ない。^⑨後に述べるごとく、この点に Pannwitz や Löwith から激しい反

論を浴びるもう一つの原因があったと言い得るであろう。

三

(A) さてそのような Schlechta の編集方針及びニーチェ観に対して最初に論争の口火を切ったのは、“Jacob Burckhardt und Nietzsche”(1938)などの著によって知られる、E. Salin であつた(月刊誌“Merkur”112号、XI. Jahrgang '57, Heft 6誌上にて)。ただしこの Salin の論調は極めて隠やかなものであり、むしろ全体の印象としては Schlechta の見解に賛意を表わす立場をとっている。その大部分がエリーザベト批判に当てられており、「エリーザベトには、ニーチェ文庫における自分に不利な一切の Dokumente を除き去るべく、四〇年という年月が与えられていた」^⑩「四〇年にわたって彼女はニーチェ伝説を識り成し、質造を続け、そしてその偽りを守り通してきた」^⑪。と言って、ニーチェ本来の姿が、多分に歪曲されたかたちで伝えられてきたことを首肯し、なおその裏にあるいろいろな事情を挙げる。たとえば、エリーザベトの夫であつた高校教授のベルンハルト・フェルスターが徹底した反ユダヤ主義的な国粹主義者で、それを憎悪するニーチェとの間にことごとく感情的対立があつたこと。しかもその事実を隠蔽するために、ニーチェのかなりの書簡・断片が妹の手によって焼却されてしまつてゐること。妹エリーザベトが

まれにみる堅忍不拔の性格の持主であつたことから、ニーチェは子供の時分彼女を“Lana”(アメリカらくだ)と呼んでいたこと。エリーザベトの編集出版した「ニーチェ書簡集」(全三巻)は今後もはや資料文献としては使用に耐ええないものであること。ニーチェとナチズムとの間の関係は今後改めて検討し直さるべきいくつかの問題点があること。そのほか Salin は、Schlechta によつて明らかにされた新事実を逐一裏付けながら、ニーチェ研究の今後に期待をかけている。

(B) R. Pannwitz の“Nietzsche-Philologie”と題する Kritik は、かなり攻撃的な一文であつた(“Merkur” 117号、XI. Jahrgang '57, Heft 11 誌上)。冒頭にこう述べられている。「私がここに書いてなすことは、K. Schlechta 編集のニーチェ著作集を紹介・書評することではなく、それに対して攻撃を加える (angreifen) ことである。」と。そして事実 Pannwitz は、Schlechta の言葉を拾い上げながら、その一つ一つに反論している。以下 Pannwitz の見解を要約すれば、

(一)「権力への意志」がニーチェ自身の手によつて成立した著作でないことは確かである。しかしながら、晩年のニーチェに理論的主著を著わす計画があつたことは残されている草案から明らかで、その標題を「権力への意志」にしようと考えたのはすでに一八八五年の春のことであつ

た。(筆者註、ただしその後一八八八年秋の構想では「すべての価値の価値転換」という題に計画が変更されている。そのことについては Pannwitz は何も触れていない。) Schlechta はひたすら「原稿に忠実な・年代順の配列」ということを強調するが、さてその年代順ということさえ決して信用に足るものではない。そのうえ、「八〇年代の遺稿から」では、形のうえでこそ従来のアフォリズムがばらばらに解体されているとはいふものの、結局すべての断片が収録されているのであるから、これならむしろ、不完全ながらも体系的に編集されている方が、都合がいいではないか。Schlechta は「権力への意志」を軽視し、遺稿類を weglassen しようとするが、この著作はニーチェの正當なかつ重要な著と言ふべきである。

(二)エリーザベトの偽作・改竄のことに關しては反論の余地はない。われわれはここ十数年来、ニーチェ文庫に立ち入ることが出来ないのであるから、この問題だけは、追究しようにも追究の手段がない。確かに Schlechta はエリーザベトに關するいくつかの新しい事実を明らかにした、そして私もそれを別に過少評価しようとは思われないが、しかし従来のニーチェ解釈に根本的な変更は必要ないはずだ。

(三) Schlechta はいわゆる第二期のニーチェを重視して、たとえば“Jenseits von Gut und Böse”以後の作

品群を何ら新しい思想展開もない “Rückstände” (残るかす) だとしているが、そのような見方は全く「おめでたい限り」^⑧ だと言わねばならない。「同じものの永遠回帰」とか「あらゆる価値の価値転換」とか「権力への意志」などは、すべて密接に絡み合った思想であって、晩年の著作を軽視してはニーチェの全体像は捉えられ得ない。

(四) Schlechte はニーチェの一連の著作の中に、「ある種の不思議な単調さ」(“eine merkwürdige Monotonie”) が感じられるとして、ニーチェ自身に対する不信感を表明しているが、「単調さ」ということなら Kant にしたって Bachofen にしたって同じことである。そういう言い方をするとすれば、哲学の歴史などごく小さな冊子にまとめることだって出来るだろう。Schlechte はニーチェの諸々の思想を指して「ちやうど同じ模様が無数に織りこまれていく絨毯みたい」であると言っているが、それは Schlechte 自身の浅薄さを証明する以外のなものでもない。

Pannwitz はおよそ以上のような意味のことをかなり皮肉まじりに述べている。それ以外にも彼は、ニーチェのニヒリズムが今日言われる desperat な sentimental なそれとは全く違った、形而上学的な世界の徹底的な Um-und Neubau をめざす produktiv なニヒリズムであること、ニーチェの言う Perspektivismus が単なる Relativismus ではなくて積極的意味をもつものであることなどについて、

て、ニーチェ評価の肯定的な言葉を連ねている。

(C) さて、この Pannwitz の批判に対して Schlechte はその数ヶ月後、それに答えるべく “Nietzsche und kein Ende” と題する一文を “Frankfurter Hefte, Zeitschrift für Kultur und Politik” (Februar 58, Heft 2) 誌上に載せた。これは前者にもまさって激越な口調の、皮肉に満ちた文章であるが、^⑨ 言わんとしていることは、ほぼ次のような事と思われる。

まず Pannwitz の反論 (一) に答えて言う。あなたは私が従来の「権力への意志」のアフォリズムを年代順に並べかえたのに対して、「信用するに足らぬ」と言われるが、ニーチェ文庫の所員として長年文献研究に携わってきた私に、その点においては素人のあなたが、そのようなことを言える権利は一体どこにあるのか。またあなたは、「権力への意志」のアフォリズムの並べ方が多少変ったからといって、従来のニーチェ解決に変動があるはずはないと言われるが、はたしてそうだろうか。もう一つ。現行の「権力への意志」を構成するときにエリーザベトとペーター・ガストがその規範にした、いわゆる「一八八七年八月一七日の草案」について、私の編集したニーチェ全集にはその記述がどこにも見当たらないと言われるが、それには私にもそれなりの理由があった。つまりあの「三月十七日の草案」というのは、ただ単にいくつかある草案の中の一つに過ぎ

ないということである。無論それが他に較べて比較的都合よく出来た草案であることは言えるかもしれないが。

Pannwitz の反論 (二) に対してはこう反駁する。妹エリーザベトの犯した罪を認めながらもなぜあなたはそのように彼女をかばおうとするのか。たとえばあなたのエリーザベトに関する *interessant* な文章で、「いづれにしても、彼女の果敢なエネルギーによってニーチェの著作、遺稿、書簡及び伝記はふんだんにこの世に紹介され、それがのちのち多大の影響を及ぼすに至った。」というような表現は、まさにある種の宗徒の言い廻しに似ており、学問的な言葉とは無縁だ。

更に (三) に対する反論はこうである。私はニーチェ自身の手になる著作以外のものは *weglassen* すると言ったが、私のニーチェ全集でも、従来すでに出版されていて、ある程度歴史的に評価の定まったものは殆んど収録されている。ニーチェ自身の意志によって出版された著作をより重要視し、その他の遺稿を第二義的にみるというのは当然のことではないのか。

最後に (四) に対して、私がニーチェの思考展開に「ある種の不思議な単調さ」を感じるということを述べたことから、あなたは私がニーチェに不信感ないし嫌悪感を抱いていると言われる。しかし私は *Nietzsche-Enthusiast* でもないし、まして *Nietzsche-Gegner* でもない。私が疑惑と

嫌悪を感じるのはニーチェに対してではなく、ニーチェをややもすると偶像視するあなたがた *Nietzsche-Verehrer* に対してなのだ。

(D) この *Schlechta* の反論が発表されてからちようど半年後に、今度は *Wolfram von den Steinen* と *Karl Löwisch* がこの論争のなかに加わった (*“Merkur”* 126号、XII. Jahrgang '58, Heft 8 誌上)。

W. von den Steinen は “Um auf Nietzsche zurückzukommen” と題して、これまでの経過及び *Schlechta* と Pannwitz の人物・経歴などを紹介しつつ、自らの論を述べる。ただし彼が Pannwitz 側に加担していることは、最初の数行をもつてしてすでに明瞭である。論点が箇条書き的にまとめられているが、それを更に要約すれば次のようなことになる。(1) 結局、“*Zarathustra*” 以前の著作に焦点を合わせる *Schlechta* と、それ以後の作品を重要視する Pannwitz は基本的に立場を異にしていると言える。(2) 私の考える限り、*Schlechta* が問題にしている事柄は「文献学的な主張」、「*Sache-Forschung*」の域を出ていない。(3) *Schlechta* は「権力への意志」という作品が前面へ押し出されたことが原因で、ニーチェの思想とナチズムが直接結び合わされる結果になったのだと言うが、その詳しい実証的な裏付けが乏しい。(4) *Schlechta* は「八〇年代の遺稿から」の編集が「原稿に忠実な・年代順の配列」という

ことを強調するが、“Philologischer Nachbericht”の中では自らこんなことも述べているではないか。「ニーチェには変な癖があつて、最初ノートの左頁だけを使い、左頁が全部終ると今度は右頁に文字をうめていったり、あるいはノートの前の方からと後の方からとをごっちゃに使用したり、すでに書き込んだノートの適当な空所を見つけては、そこに断片を書き加えたりした」^⑧。そのような手稿をはたして厳密に年代順に並べることが出来るものか。もし仮りにそれが可能だったとしても、一つの断片成立と次の断片成立との間に、一体一日の間隔があつたのか一年の間隔があつたのかという問題も出てくるではないか。

(E) K. Löwith のほうは、“Zu Schlechtas neuer Nietzsche-Legende”と題して、穏やかな調子で自らの感想を述べている。つまり、(1) Bäumler が、「永遠回帰」を単なる宗教的概念だと軽く見過ごしたのと同様の意味で、Schlechtas は「権力への意志」を軽視し過ぎている。そのような見方は「シュレヒタの新ニーチェ伝説」と言われても仕方あるまい。(2)「権力への意志」に新しい思想展開がないと言うが、「ニヒリズムの到来」、「ヘラクレイトスの・デイオニュソスの世界」に関する詳細な記述は他には見られないものである。やはりこの著はニーチェの主著の一つと言うべきである。(3)「権力への意志」の断片群の再構成にはあまり意味があるとは思えない。なぜならその主要な

三つのテーマが“der Wille zur Macht”と“die ewige Wiederkehr”と“der universale Gesichtspunkt des ebendigen Seins der lebendigen Welt”であることには変わりないのであるから。

(F) この Löwith の批判に対して Schlechtas は、その著“Der Fall Nietzsche”の第二版(1959)に“Offener Brief an Karl Löwith”という一文を加えて、公開状のかたちで答えている。これは前回の激しい調子の反論とは違って、むしろ控え目に自らのニーチェ観を披露した文章になっている。上記(2)の見解に対しては、(1)のような思想の展開ならそれ以前の作品にもすでにその記述があるから、近く出版予定の私の“Nietzsche-Index”を参照願いたい。ニーチェが「権力への意志」を“eine Grundeigenschaft des Lebens”と見なしていたことは確かだが、それを自らの主著と認めていた事実はないと思う。(2)従来ニーチェは余りにも spiritualistisch (唯心的に) 解釈されてきたのではないか。そしてそれがいわゆる「ニーチェ神話」を生む原因にもなったことを思うと、ニーチェはもつと sachlich に捉えられなければならないと私は考える。

論争の経過の要点のみを簡単に辿ってきたが、正直に言つて、余りにも言葉を切りつめたため、あるいはそれぞれ

の論調を損つたり、重要な発言を書き落したりしているかもしれない。それはすべて筆者の責任である。

四

一般的に言つて、論争というものには、ある程度感情的な表現が避けられないということはむしろ当然であろう。案外問題の本筋から離れたところで、相手に対する攻撃、皮肉、揚げ足取りなどが行われていることも少なくない。実のところ、今回の論争の場合においても、決して論点が厳格に絞られているとは言えないし、お互い相手の不可、弱点をあげつらっている箇所も多い。それらのことを一応認めたらうで、さて、今回の論争のもつ内容と意義は客観的に言つてどういうことになるのであるか。

論争の中心点はやはり遺稿集「権力への意志」をめぐる問題であつた。シュレヒタは長年ニーチェ文献の研究に携つてきた経験に基いて、エリーザベトの作為ある偽造行為をかなり具体的に摘発した。その暴露的な論述は、Podachの場合と同様、興味ある事実として注目を集めるに十分であつた。ニーチェ文庫の所員でありながら、エリーザベトの存命中は資料さえ十分見せてもらえなかつた事実、そしてその背後でエリーザベトを中心にして織り成されたいわゆる「ニーチェ伝説」、その中でも特に、ファシズムの台

頭という時勢に歩調を合わせるかのごとく「でつち上げ」られた「権力への意志」——シュレヒタはエリーザベトの非をあげくと同時に、従来のニーチェ文献に対して、かつまたニーチェ解釈に対して、一つの大きなアンチテーゼを呈示したのであつた。そしてその主張の具体的な表われの一つが、従来の「権力への意志」の解体・再構成ということであつたと見ていい。従つてこのことは、断片群をどのような基準によつて配列するかという文献学的な問題の領域だけに留らず、ニーチェの全体像の中でこの作品をどのように意義づけていくかという Interpretation の問題と深く絡まつている。今回の論争が取り行われたのも、実はこの段階においてであつたと言ふべきであろう。事実、パンヴィッツにしろシュタイネンにしろ、シュレヒタの文献学的な実証という点に関しては、殆んど反論の余地のないことを認めているのである。今回の論争の特徴は、Sache-Forschung に端を発しながら結局は Interpretation の次元で事が争われているということになるであろう。言葉を換えて言えば、文献上の問題を契機としながら、実際はニーチェに対するアプローチの姿勢が問題にされていると言つて過言でない。

シュレヒタは第二期のニーチェ、つまり反時代的な、徹底したニヒリストとしてのニーチェに焦点を合わせることには先にも触れた。この基本線にそつてシュレヒタが、「権

力への意志」をはじめとする遺稿・断片類や初期、晩年の諸作品を *abschätzen* し、一連のニーチェの著作に「月夜の風景のような」^⑧「ある種の不思議な単調さ」を認めるとき、彼はパンヴィッツ、シュタイネン、レーヴィットなどから非難の声を浴びせられる。レーヴィットの反論にも見られたように、ニーチェの哲学から完全に「権力への意志」の思想を拒否しようとするシュレヒタの姿勢にも問題は残るが、それはひとまず措き、より大局的にニーチェ解釈の歴史を見渡した場合のシュレヒタは、一体どのように理解されるべきであろうか。

たとえばベルトラムがニーチェをその歴史的な問題性においてではなく、一種の聖伝として、「表徴」、「すがた」として扱ったことは周知の事実である。ボイムラーが、ニーチェの哲学を権力意志に切り詰めて、そこに原始ゲルマン的な「英雄の実在論」を見てとったことも既知のことに属する。さてこの両者が、その方向こそ対蹠的であるとはいえ、共通して *spiritualistisch* な *legendenhaft* なニーチェ解釈法をとっていることは明らかである。しかるに、その後の、R. Pannwitz, E. Jünger, G. Benn などの系譜をたどって見た場合、そこに、共通したある *esoterisch* (秘教主義的) とも言えるような、ニーチェへのアプローチを認めないわけにはいけない。

それら Nietzsche-Verehrer らは当然ながら、*seelenhaft*

な雰囲気の中かでニーチェに相対し、ニーチェから Geist よりも Seele を、第二期のニーチェよりも第一期、第三期のニーチェを求める。ニーチェの教説設との接触がいわば個人的な「秘儀」に終始し、ニーチェの歴史的意義を問う *wissenschaftlich* な設問が従来不足していたということに對してこそ、シュレヒタはアンチテーゼを呈示し、批判の矢を射ったのではなかったのか。シュレヒタはシュタイネンに対する反論の中で次のようなことを述べている。「私がそれを危険視して、批判を加えたのは、彼らの *Spiritualität* に対してなのであった。ところがそれが何か個人的なものに曲げて解されている。」^⑨「ゲオルゲ一派の思想圏内にあるベルトラム、クラークスの心理学的、文学的なニーチェ把握、そしてエリーザベトやボイムラーにみられる政治的色彩を加味したニーチェ把握、さらには現代におけるヤスパース、ハイデッカーなどの実存主義哲学からのニーチェ把握——半世紀余りにわたるニーチェ解釈の歴史から、そのアウトラインを抽出してみると、シュレヒタの特異なアプローチの仕方、自然そこに浮き彫りにされてくるのではないか。つまり、シュレヒタは文献学を基礎にして、客観的に *sachlich* に（あえて言うならば、むしろ冷淡に）ニーチェの持つ歴史的な意味を問おうとしたのではなかったのか。そして、シュレヒタ自身が言明したごとく、彼は Nietzsche-Enthusiast と Nietzsche-Gegner の

中間点に立脚して、ニーチェの周辺に漂う一切のもやを振り払い、ニーチェ伝説の被膜をはがそうとしたのだということ、少なくとも明言できることである。確かに、レーヴィットも言うように、個々の点においてはまだ問題も残るし、ニーチェに対する積極的な意義づけの姿勢という観点から、文献学者としてのシュレヒタの限界を云々することも出来ないことではない。がしかしともかく、今回の論争が、ニーチェ研究という立場からみて、伝説的・神話的ニーチェ像から歴史的・客観的ニーチェ像への推移を告げる、センセーショナルな一コマであることは言うをまたないところであろう。

なお P. Pütz は『^⑤ Times Magazine, "Les Nouvelles Littéraires, " "Die Welt"』などのジャーナリズム関係は、そのついでシュレヒタの文献学的な功績を高く評価している点のほうである。

Bibliographie

- 1 F. Nietzsche, Werke in 3 Bdn. Herausgegeben von K. Schlehta (1960)
- 2 K. Schlehta: Der Fall Nietzsche (1959)
- 3 P. Pütz: Friedrich Nietzsche (1967)
- 4 E. Salin: Burckhardt-Nietzsche (1959)

- 5 R. Panwitz: Der Nihilismus und die werdende Welt (1951)
- 6 K. Löwith: Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen (1956)
- 7 E. Podach: Ein Blick in Notizbücher Nietzsches (1963)

註

- ① "Merkur" 112号 (XI. Jahrgang '57, Heft 6) S. 576
- ② 以下は E. Podach: Nietzsches Werke des Zusammenbruchs (1961), 以下は Podach: Ein Blick in Notizbücher Nietzsches (1963),
- K. Schlehta: F. Nietzsches Werke (以下 Schlehta 以下は) Bd III. © Philologischer Nachbericht 以下。
- ③ Schlehta 以下 Bd. III, S. 1420—1422 参照。
- ④ Der junge Nietzsche (1912), Der einsame Nietzsche (1914), Wagner und Nietzsche zur Zeit ihrer Freundschaft (1915), Der werdende Nietzsche (1924), Fr. Nietzsche und die Frauen seiner Zeit (1935)
- ⑤ "Merkur" 117号 (XI. Jahrgang '57, Heft 11) S. 1076
- ⑥ Nietzsche-Index zu den "Werken in 3 Bden" 以下 1965 以下参照。
- ⑦ Fr. Nietzsche und die Frauen (1933), Die Briefe des Freiherrn Carl v. Gersdorff an Fr. Nietzsche. 3 Bde. (1934—36), Der junge Nietzsche und das klassische Altertum (1948), Nietzsches großer Mittag (1954), Der

Fall Nietzsche (1959).

- ⑧ K. Schlehta : Der Fall Nietzsche, S. 9
- ⑨ エリーザベトはモトラーをニーチェ文庫に招くなどしてかなりの演出を心得ていた。
- ⑩ Der Fall Nietzsche, S. 15
- ⑪ ibid. S. 16
- ⑫ ibid. S. 15
- ⑬ すぐそばにいたニーチェの思想に、 “ eine merkwürdige Monotonie ” が感じられると言明している。
- ⑭ “ Merkur ” 112号’ S. 575
- ⑮ ibid. S. 579
- ⑯ “ Merkur ” 117号’ S. 1073
- ⑰ “ Das heißt das Pferd am Schwanz zu zäumen ” という皮肉な表現を使っている。
- ⑱ W. von den Steinen の Schlehta の文章がアカデミックな語彙の錯綜を競えたもののせもあるとしてこれを非難している。
 (“ Merkur ” 126号’ S. 774)
- ⑲ Schlehta 監’ Bd. III, S. 1396
- ⑳ Der Fall Nietzsche, S. 20
- ㉑ ibid. S. 13
- ㉒ P. Pütz : Friedrich Nietzsche (1967), S. 6
- ㉓ ibid. S. IX.